

令和七年十一月一日開催
令和七年度 高知県戦没者追悼式

追悼のことば

土佐清水市遺族連合会

会長 吉名 征郎

本日ここに、濱田高知県知事をはじめ、各界代表の皆様方、県内各地のご遺族の皆様のご参列のもとに、令和七年度高知県戦没者追悼式が、厳粛に執り行われるにあたり、戦没者遺族を代表し、また、遺児の一人としてしまして、謹んで追悼のことばを申し上げます。

私は、今年、日本武道館で挙行されました全国戦没者追悼式に参列し、高知県遺族を代表して献花をさせていただきました。英霊に哀悼の誠を捧げることができましたと同時に、父も喜んでくれたと思います、一歩、父に近づけた感じがしました。

父と過ごした時間は少なく、思い出もあまり多くはありませんが、私が四才くらいの時、父に連れられ、金剛福寺の涅槃祭りに出掛けました。

父の自転車に乗せてもらって、坂道と一緒に、風を切って走ったことを覚えています。

それから間もなく、父は出征し、昭和二十年六月、フィリピンのルソン島の山中で戦死しました。私が六歳の時でした。

戦後、父の戦友が家を訪れ、父の最期について聞かせてくれました。アメリカ軍に追われ、山中へと逃げているうち、父はマラリアに感染したそうです。薬もない状況の中、戦友が、持っていた黒砂糖を父に食べさせたところ、父は、「うまい」と言っていて切れたそうです。この時の父を思うと、さぞ苦しかったことだろうなあと胸が痛みます。

父亡き後、私の母は、昼は田畑を耕し、夜は遅くまで木炭の袋を編み、子供の成長のみを楽しみに、一生懸命私を育ててくれました。時には、「二人だけになったけど、二人で頑張ろうね」と励まし合い、戦後の混乱の中、

必死に家族を支えてくれたその御恩は、一生忘れることはできません。

その母も、九十六歳で父のもとへと旅立ちました。今でも、父や母を思い、逢えるものならもう一度逢いたい気持ちは変わりません。

先の大戦が終わりを告げ、八十年の歳月が経ちましたが、いまだ争いの絶えないこの世の中です。戦争さえなければ、私の父のように「戦死」ということは起きません。戦中戦後の苦しみや悲しみを、子や孫に味あわせてはいけないうし、私たちはそれを伝えていかなくってはならないと強く思います。

戦争の記憶を次の世代に語り継ぎ、しっかりと継承していくためにも、この追悼式も末永く執り行っていただきますようお願い申し上げます。

終わりにあたり、すべての御霊の御冥福と、本日ご参列の皆様のご健勝、ご多幸をご祈念申し上げます。追悼のことばといたします。